読み聞かせにおける読み手と聞き手の比較
―注目箇所と理解度に着目して―

千葉樹子

子どもを対象とした読み聞かせは，保育所や学校，家庭など様々な場所で行われており，子どもと絵本の出会いの場としての役割を果たしている．また従来，子どもを聞き手とした読み聞かせの研究は多く行われてきており，子どもにとって教育的意義があることが知られている．一方で，子どもが読み手として読み聞かせをした場合の研究についてはあまり行われていない．そのため，子どもが読み手となった場合，聞き手であるときと比べてどのような学習効果があるかは明らかになっていない．一般的に，絵本の読み手は，文章を読む必要があるため，絵よりも文章に注目する割合が高くなると想像できる．それによって，絵本の理解度も少なからず影響を受けるのではないかと考えられる．

そこで本研究では，子どもが読み手，聞き手それぞれとして読み聞かせに参加した場合に，絵本の注目箇所と理解度に違いがあるのかについて，実験によって明らかにすることを目的とする．

本研究では，小学校３年生４名を対象とし，読み手と聞き手の理解度と注目箇所を比較する実験を行った．実験に使用した絵本は，川端誠の落語絵本シリーズより,「はつてんじん」と「いちがんこく」の２冊である．まず読み手，聞き手どちらかとして実験実施者と読み聞かせを行った．読み聞かせ終了後，参加者には絵本の内容理解を測る理解度テストに回答してもらった．その後，読み手と聞き手を入れ替え，もう一方の絵本で同様の操作を実施した．なお，理解度テストは２冊の絵本それぞれについて作成し，絵本内の文章に関する内容３題，絵に関する内容３題の計６題で構成した．

実験の結果，読み手と聞き手の間で理解度テストの得点に有意な差は見られなかった．また，読み手，聞き手いずれにおいても，文章に関する問題と絵に関する問題の間で，得点に有意な差は見られなかった．これらの実験結果に差が出なかった理由として，実験に用いた絵本の難易度や理解度テストの設問内容が適切でなかった可能性が考えられる．ただし，２冊の理解度テストの設問を，物語の内容に関連性の高いａ群と関連性の低いｂ群に分類したところ，読み手，聞き手に関わらず，ａ群の設問が有意に正答率が高くなった．このことから，読み手，聞き手ともに，物語の内容に関連性が高い部分に意識が向いていた可能性がある．

本研究の結果，読み聞かせ中の理解度と注目箇所について，読み手と聞き手の間で差はあるとは言えなかった．しかし，読み手も聞き手も，物語の内容と関連性が高いところに注目していることが示唆された．今後の課題は，実験に用いる絵本や理解度テストの内容を再検討すること，サンプル数を増やして実験をすることである．

（指導教員　松村敦）